

「君死にたまふことなかれ」と、その後

—与謝野晶子と戦争—

松井貴子

一 「君死にたまふことなかれ」

戦争にかかわる^と与謝野晶子を考えると、まず思い浮かぶのは「君死にたまふことなかれ」(明治三七・九「明星」五一—五二頁)である。

この詩には、(旅順口包囲軍の中に在る弟を嘆きて)という副題がつけられ、

あゝをとうとよ君を泣く

君死にたまふことなかれ

末に生れし君なれば

親のなさはまさりしも

親は刃をにぎらせて

人を殺せとをしへしや

人を殺して死ねよとて

二十四までをそだてしや

堺の街のあきびとの

旧家をほこるあるじにて

親の名を継ぐ君なれば

君死にたまふことなかれ

旅順の城はほろぶとも

ほろびずとも何事か

君知るべきやあきびとの

家のおきてに無かりけり

君死にたまふことなかれ

すめらみことは戦ひに

おほみづからは出でまさぬ

かたみに人の血を流し

獣の道に死ねよとは

死ぬるを人のほまれとは

大みこゝろの深ければ

もとよりいかで思されむ

あゝをとうとよ戦ひに

君死にたまふことなかれ

すぎにし秋を父ぎみに

おくれたまへる母ぎみは
なげきの中にいたましく
わが子を召され家を守り
安しと聞ける大御代も
母のしら髪はまさりけり

暖簾のかげに伏して泣く
あえかにわかき新妻を
君わするるや思へるや
十月も添はでわかれたる
少女ごころを思ひみよ
この世ひとりの君ならで
あゝまた誰をたのむべき
君死にたまふことなけれ

と詠まれている。

晶子は、二歳年下の弟籌三郎が日露戦争の旅順攻略戦に投入されたらしいという噂を聞いて、この詩を作った。籌三郎は十人兄弟の六番目、男子の中では末子である。彼の勤めで晶子は浪華青年文学会に入り、やがて「明星」に短歌を発表することになった。晶子の実家は堺の甲斐町の老舗の菓子屋駿河屋で、前年に

父宗七が死去。籌三郎が跡を継ぎ、母つねが店を切り盛りしていた。前年に数え年十八才で嫁入りした籌三郎の妻せいは身重であった。籌三郎は実際には旅順に行かず、生きて帰って来たが、乃木希典の率いる日本軍の死傷者は五万九千人に上っている。

翌月、大町桂月は「文芸時評」の「雑評録」②で、この詩に対する批判を述べている。晶子に対して「放縦にして思ひ切つた事言ふ人」という認識を持つ桂月は、「教育勸語、さては宣戦詔勅を非議す。大胆なるわざ也。」「家が大事也、妻が大事也、国は亡びてもよし、商人は戦ふべき義務なしと言ふは、余りに大胆すぎる言葉也」と攻撃する。晶子の、天皇を引き合いに出しての物言いや、国よりも家族を大切なものとする考えの表明が、このような、非難にみちた批評をひきおこしたといえよう。

ここで問題になるのは、非難の対象となっている第三連の「すめらみことは戦いに／おほみずからは出でまさね」の部分で、桂月はこれを「なほ自らは出でまさね」として引用している。こうなると天皇を個人攻撃しているというニュアンスが強くなり、この引用が意図的なものであれば、悪意に解釈しようという桂月の意図は明らかであろう。桂月は、この詩の発表以前

から、晶子の作風の伝統的ではない面に批判的であった。(3)

晶子は、桂月の批評に対して「ひらきぶみ」(4)で、鉄幹への手紙の体裁をとって応えている。自分は天皇を敬っていること、戦争には勝てと祈っていることを述べつつ、戦死を美德とする風潮に批判を加えている。そして、「まことの心」を詠むことのみを是とする晶子の強烈な自己肯定は、この詩をめぐる論争を、桂月対晶子という個人の論争にとどまらず拡大させることになった。

晶子の詩にやや遅れて、大塚楠緒子も次のような詩を発表している。

ひとあし踏みて夫思ひ

ふたあし国を思へども

三足ふたたび夫おもふ

女心に咎ありや

朝日に匂ふ日の本の

国は世界に只一つ

妻と呼ばれて契りてし

人も此世に只ひとり

かくて御国と我夫と

いづれ重しとはれなば

たゞ答へずに泣かんのみ

お百度詣あゝ咎ありや

〔お百度詣〕明治三八・一「太陽」一一七頁)

同じく戦場にいる家族を思う気持ちを詠みながら、楠緒子に比べて晶子の表現がいかに積極的で人目を引くものであるかわかる。しかし、晶子の詩のすべてがセンセーショナルな表現に満ちているわけではない。晶子の詩を見てみよう。

第一連は「あゝをとうとよ、君を泣く」と朗唱するごとく力強いリズムで詠い出され、「親のなざけはまさりしも」までは比較的穏やかな表現である。「親は刃をにぎらせて」あたりからヒステリックな感情が顔を出し始めるが、晶子の詩ということでまだ許容範囲であろう。第二連では、興奮を維持しつつも抑え気味に表出された第一連からの感情の昂ぶりが噴出し、「ほろびずとても、何事ぞ、」の表現が引き出される。このあたりから、いくら晶子の詩とはいえ、これは、というものになってくる。そして第三連に至って、感情の

昂ぶりは最高潮に達し、論争を呼んだ激しい表現に至るのである。ここが作品の眼目であり、強く人の心に訴えかけるのであるが、天皇を持ち出したことが問題を引き起こしている。第四連では、晶子の口調は攻撃性を弱める。息子を戦争にとられた老母の嘆きを詠んでいるためであるが、ひたすら耐え忍んで泣く女性の涙は「お百度詣」でも詠まれたものである。第三連の陰に隠れて気づかれにくいのかもしいないが、晶子は当時の、時代が是とする女性像をも自らの詩の素材として利用しているのである。さらに第五連でも夫の帰りを待つ若い新妻の涙を詠んでおり、全五連のうち、二つの連がただ涙するばかりの女性を詠むことに使われている。はつきりと自身の考えを表明する自分との対比としてこれらの女性をとらえ、作品に詠んでいるということが考えられ、このことが、この詩で晶子自身の発言と思われる部分をより際立って見せる効果を生んでいる。

二 晶子と天皇

「君死にたまふことなかれ」は、天皇が詠まれているために、非常にセンセーショナルな詩となったが、そ

れでは、晶子にとって天皇とはどういうものであったのであろうか。

晶子は、国語問題に関する発言で、しばしば天皇を引き合いに出している。小学修身に「テンノウ」ではなく「テンノウ」とあることは、「皇室に対する最大不敬」⁽⁵⁾であり、明治天皇の歌に原表記と異なる仮名遣をすることは、「全く乱暴至極の沙汰」⁽⁶⁾なのである。天皇にかかわる表記を例として文部省を攻撃する姿勢は、国粹主義が強まる時勢の中で自説を述べるにあたって、明らかに意識的である。このあたり、「君死にたまふことなかれ」が論争を引き起こしたことから、「天皇」というものが非常にインパクトの強い素材であることを認識して、うまく使うことを意図した結果ではないだろうか。晶子は文部省が定めた仮名遣で、「畏れ多くも明治天皇御集の御歌が、あれだけ正確な学問的仮名遣でお認めになつてある尊厳な典札を破壊し奉るやうな結果ともなる」⁽⁷⁾と批判しつつ、「今上陛下が特に典雅なる文字文章の存在することを国民の前にお示しになつた事を、私は難有いと存じ上げて居ます。」⁽⁸⁾と天皇を賛美し、自説を補強するのである。遡って考えてみると、「君死にたまふことなかれ」を發表した当時は、まだ「天皇」の持つ効果をそれほど

までには意識していなかったと思われる。

晶子は、詩歌において最も大切なことは、自己の実感を、時を置かずに一気に発露すること、読者に迎合せず、言いたいことを言いたままに表現することであるという詩論を表明している。⁽⁸⁾ この考えは、晶子の詩の根幹をなすものと見てよい。この詩歌観からすれば、「君死にたまふことなかれ」は弟の出征に対して抱いた思いを、後先を考える余裕も持たずに吐露したものである。

それまでの晶子の文学的素養を考えると、源氏物語を繰り返し読み、他の王朝物語も愛読していたのであるから、晶子の性格からして、作品の中にのめり込んでいたことが推測される。つまり、晶子にとっての「天皇」は現実の天皇でもあり、物語の中に生きている天皇でもある。物語に登場する姫君に自らを同化していたであろう晶子の脳裏にある天皇は、非常に近い存在であったに違いない。作品の素材の一つとして心に浮かんで来たというのが本当のところではないかと思われる。「ひらきふみ」で「あれは歌に候。」と明言し、王朝物語や軍記物と同列に位置づけようとしているのは、その表れであろう。「ひらきふみ」の後、晶子は論争の表舞台から退く。そして、論争を通して認識した

「天皇」という素材の効果を熟考し、積極的に利用するに至るのである。

三 「君死にたまふことなかれ」後の戦争詩

晶子は、日露戦争の後も、戦争があるたびに、戦争を題材として詩を詠んでいる。

第一次世界大戦のときに詠まれた「戦争」⁽⁹⁾ という題の詩では、「大錯誤の時が来た」と戦争を非としながらも、自分の身内が関係していないためか、結局は戦うことを肯定している。真の平和をもたらすために「いまは戦ふ時である」と詠むのである。

そして、大戦が終結した時には、「一九一八年よ」⁽¹⁰⁾ と題して、無邪気に終戦を喜び、非常に楽天的に、無条件に、「人間の善」を詠いあげている。これも、自分の身辺に戦争の被害が及ぶことがなく、観念的に詠んだ結果であろう。

昭和に入ってから作品「詩四章」⁽¹¹⁾ になると、確かに戦争を非とする考えを表明していることは読み取れるのであるが、その表現は「我は思ふ、／などか此の尊き戦死者の霊を／此のふるさとに送るに／一等車を以てせざりしや。／我が涙また落つ。」と、晶子の詩とし

ては非常に控えめな表現になっており、しかも女性の涙を素材に用いている。評論でも、「合法的に解決を計らうとしないで暴力の非常手段に訴へることは、明治天皇の教育勅語に要約せられた国民の生活理想と全く相反するものである」⁽¹³⁾と、間接的な言い回しを注意深く用いている。このあたり、時代の影響、圧迫といったものが感じられる。志賀直哉が未定稿二〇八⁽¹⁴⁾で書いているように、この時代は軍部が台頭し、息苦しい時代になっていた。⁽¹⁵⁾

直哉は、日露戦争の頃はまだそれほどでもなかったと言っているが、それは、森鷗外の「うた日記」に収められた詩「扣鈕」⁽¹⁶⁾を見てもわかる。日露戦争での陣中吟でありながら、「南山の たたかひの日に／袖口の こがねのはたん／ひとつおとしつ／その扣鈕惜し」で始まり、「ますらをの 玉と砕けし／ももちたり それも惜しけど／こも惜し扣鈕／身に添ふ扣鈕」で終わる「扣鈕」は、軍医として戦場にあるものが詠んだ詩としては、恐ろしく不謹慎である。そのような詩を詠み、公刊することが、日露戦争の時代にはまだ許されていたわけで、「君死にたまふことなかれ」も、その時代の雰囲気の中で生まれ得たのである。

太平洋戦争末期、晶子の最晩年に発表された歌「峰

の雲」⁽¹⁷⁾は、海軍に志願した四男⁽¹⁸⁾を思って詠んだものであるが、

日の本の大宰相も病むわれも同じ涙す大さ詔書に

水軍の大尉となりてわが四郎み軍に往く猛く戦へ

子が船の黒潮越えて戦はん日も甲斐なしや病ひする母

子が乗れるみ軍船のおとなひを待つにもあらず武運あれかし

戦ある太平洋の西南を思ひてわれは寒き夜を泣く

と、かつて「君死にたまふことなかれ」を詠んだ面影は感じられない。子を思う心情も表出されてはいるが、表立って戦争に異を唱えるのではなく、子の武運を祈るものになっている。「死ぬな」とも、「無事で帰れ」とも言えず、武運を祈る陰で、ひそかに子の無事を願う母には、やはり涙が添えられている。病身であることによる晶子の気力の衰えは大きいものであろう

が、言論の自由がほとんど抹殺されたこの時代の圧力
の大きさが感じられる。晶子でさえも、時勢の圧迫と
気力の衰えにより、このようになってしまったとい
うことであらうか。

註

- (1) 初出での題は「君死にたまふこと勿れ」。晶子の著作
は、初出の雑誌以外は『定本 与謝野晶子全集』（昭和
五三―五六 講談社）による。ルビを省略し、新字に
改めた。
- (2) 明治三七・一〇「太陽」一五七頁。
- (3) 「文芸時評」の「一是一非」（明治三七・九「太陽」一
五四―一五五頁）。
- (4) 明治三七・一一「明星」九八―一〇二頁。
- (5) 「仮名遣に就いて」（大正一〇・一〇―一一「明星」、全
集十九卷四二八頁）。
- (6) 「文部省の新仮名遣に対する抗議（一）」（大正一四・
二「婦人公論」、原題「文部省の極端な実用主義」、全
集十九卷一八六頁）。同様の発言は「国語と仮名」（昭
和二・一二・一一日「横浜貿易新報」、全集十九卷四六
二頁）にも見られる。
- (7) 「国語国字の尊重」（昭和五・四・六日「横浜貿易新報」、
全集二〇卷一五一頁）。

- (8) 「日本人として」（昭和二・一・九日「横浜貿易新報」、
全集十九卷三〇八頁）。
- (9) 「新体詩の作り方」（大正六・三「婦人画報」、全集十
六卷一四五頁）。「詩歌の本質」（『流星の道』大正二三・
五 新潮社、全集十二卷四七二頁）。
- (10) 大正三・八・一七日「読売新聞」、全集九卷二二〇―
二二二頁。
- (11) 大正七・三「婦人公論」、全集一〇卷三二七―三六八
頁。
- (12) 昭和一〇・一「冬柏」、全集一〇卷四七六―四七八頁。
- (13) 「国民と兇徒」（昭和七・五・二二日「横浜貿易新報」、
全集二〇卷四一四頁）。
- (14) 「志賀直哉全集」第九卷（昭和四九・三 岩波書店
六四二頁）。
- (15) 志賀直哉は軍医を利用して巧妙に徴兵拒否をした。詳
細は拙稿「志賀直哉の文学環境」（『比較文学・文化論
集』一一号 平成六・三 四一―六〇頁）。
- (16) 岩波文庫「うた日記」昭和一五・五 四〇―四一頁。
昭和一七・一「冬柏」、全集七卷四七六頁。
- (17) ロタンが命名したアウギュストの名を自ら昱と改名し
て海軍に志願した。
- (18)